

総合的な学習の時間における番組制作を通して

宮城県石巻市立蛇田小学校
教諭・齋藤 慧

1 はじめに

現代の科学技術の発展は変化の激しい社会を生み出し、これからさらに価値観の多様化が進むものと予想される。この変化の中にあっても、自分で課題を見付け、考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を身に付けていこうとする総合的な学習の時間が担う役割は大きいと考える。

しかし、これまでの自身の実践を振り返ってみても、必ずしも総合的な学習の時間が担う役割を十分に達成しているとは言えないように感じている。年間指導計画で決められた学年のテーマに沿って「調べ学習をしてまとめる」というような感覚が強く、必ずしも主体的に取り組んでいるとは言いきれない。

また、筆者が昨年まで勤務していた石巻市立寄磯小学校は県内唯一のへき地3級指定校である。当時は全校児童7名の完全複式学級だった。学区内の寄磯浜、前網浜では、ホヤやホタテ、ワカメなどの養殖漁業の盛んな漁師町であり、当時在籍していた児童の家庭のほとんどが漁業に携わっていた。2011年3月に発生した東日本大震災では、児童や保護者の犠牲こそなかったものの、高さ10mの津波が地域を襲い、ホヤやホタテなどの養殖漁業が壊滅するなど甚大な被害を受けた。現在、地域内の工事は進んだが、人口の減少や少子高齢化、労働力や後継者の不足は深刻度を増している。また、風評被害による海産物の輸出制限など、地域の抱える課題は大きい。こうした中においても、児童は自分たちの地域に愛着を深く持ち、家族の仕事にも誇りを持っている。「将来漁師になりたい」と考えている児童も多数いる。その反面、自分たちの地域の自慢できるところを挙げさせると、「ホタテがとれる」「ホヤがおいしい」

「地域の人が優しい」など抽象的なイメージが多く、地域の抱える問題については知らない児童がほとんどで、地域について十分に知っているとは言えない実態があった。

本実践では、筆者が担任をしていた5・6年児童3名（5年男児2名、6年男児1名）の活動を取り上げる。国語、社会、理科は複式による指導、算数は単式による

指導、それ以外の教科はA・B年度方式による指導を行っている。5・6年生の総合的な学習の時間では単元名「寄磯・前網をもっとよく知ろう」として、通年で55時間取り組んでいる。

児童が自分たちの住む地域を見つめ直し、自分たちがこの地域でどのように生きていくのか考えていけるような総合的な学習の時間になるよう考え実践を進めた。

2 目標

番組制作を通して児童自身が地域の抱える課題やよさについて考え、自分の生き方を考えることができるようにする。

3 実践内容

(1) 番組制作に至った経緯

子どもたちから出た疑問を手掛かりにテーマを決められるように、4月のテーマ作りの段階では、まず、「寄磯の自慢したいところ・気になるところ」を付箋紙に書き出させた。極少数で多くの考え方を引き出すために付箋紙に書き出しグルーピングをしていく方法は、普段の授業の中でもよく取り入れている。そこでホヤの貝毒で家族が困っている内容が話題に挙がった。この頃、宮城県中部海域で水揚げされたホヤから麻痺性の貝毒が検出され、ホヤの自主規制が行われたのである。子どもたちは家族から、「ホヤから貝毒が出たことで、これまで3年育ててきたホヤが出荷できない」「収入がなくなるどころか損害まで出る」という話や、「ホタテやワカメなどの他の寄磯・前網の海産物にも風評被害が出る」という話を聞いていた。そこから「ホヤは貝の仲間ではないはずなのにどうして貝毒になるのか」という疑問が子どもたちの中で生まれた。

子どもたちから出た疑問を基に、テーマを「ホヤの貝毒とはどういう仕組みなのかを明らかにし、正しい情報をたくさんの人に伝えること」「寄磯・前網の魅力をもっとたくさんの人に発信する」とした。また、「たくさんの人」に伝えたいという点から、6年生児童から

「5年生の社会科で勉強した報道のように、取材したものを編集してニュースにするのはどうか。」という提案が出たことで、地域のニュース番組仕立てにまとめていくことにした。

(2) 番組制作の進め方

1つのニュース番組の中のトピックを考え、「ホヤの貝毒」、「ホシガレイの稚魚の育成」を大きく取り上げることにした。それぞれのトピックごとにキャスター、カメラマン、ディレクターを役割分担した。

子どもたちはこれまで、総合的な学習の時間だけでなく、様々な教科の学習活動でパソコンを活用してきた。国語や社会科の新聞づくりやリーフレットづくりではWord、外国語や国語の発表やプレゼンテーションではPowerpointを活用してきたため、パソコンの操作に慣れており、タイピング技能も高い。今回、原稿の作り方について子どもたちに選択させたところ、「手直しをしたり構成を組み替えたりするのが楽なように」という理由からWordでの作成を選択した。それに伴ってインタビュー内容も、分担しながらイヤホンを使って書き起こすことを提案したところ、意欲的に取り組んでいた。データは学校内の共有フォルダに保存させることによって、それぞれの書いた文章を互いに共有したり推敲したりすることが簡単にできるようになった。

(3) 実践「YORISTA」番組制作

① トピック1「貝ではないホヤが貝毒になる？」

子どもたちの関心が一番高かった「ホヤの貝毒」をトピック1とし、ホヤの生態について詳しく調べること、貝毒とはいったいどういうものなのかを図鑑、新聞記事、インターネット、石巻市や女川町の刊行誌などを基に調べた。調べていく中で、ホヤは二枚貝ではなく尾索動物であることが分かった。専門的な用語が多く、資料の読み取りが難しいかと思っただ、知識と体験が結び付き、よく理解することができていた。寄磯小学校では「海洋体験」という行事が毎年行われている。保護者が「先生」となり、漁船に乗ってアワビやタコの水揚げやホタテの耳吊りなど、様々な漁業体験を行うのである。子どもたちは、そこでホヤの水揚げと殻むき体験を経験していた(図1、図2)。地域の方々に教えてもらいながら入水孔や出水孔、管などを確認しながら実際にホヤの殻をむいた経験が、今回調べた内容と結び付

き理解を深めることができた。



図1 ホヤの水揚げ体験



図2 ホヤの殻むき体験

次に貝毒とは何かについて調べた。貝毒とは、主に二枚貝が有毒な植物性プランクトンを餌として食べてしまうことで発症するものだということが分かった。すると、子どもたちの中で二枚貝ではないホヤが貝毒になってしまうことにますます疑問が深まった。調べていく中で、ホヤの餌が「植物性プランクトン」であることに着目し、二枚貝と同じように植物性プランクトンを食べたことで発症していることが分かった。

調べたことを基にトピック1の撮影を行った。まずはホヤの貝毒がいつ、どこで発生したかを撮影し(図3)、「海洋大学の教授からホヤの生態について話を聞く」という形で撮影作業を行った(図4)。専門家から話を聞くという設定にしたのは、海洋大学の教授役の児童が「漁師をしながら海洋大学の先生をしたい」という将来の夢を抱いていたためである。そのことに気付いた6年生が5年生に「専門家役をやってみたら。」と提案した。原稿は分担して作成し、最後に6年生児童がまとめて修正を行い完成させた。



図3 ホヤの貝毒が発生したことを報じる様子



図4 専門家役の児童がホヤの貝毒について説明をする様子

ホヤの出荷の規制解除になるためには、3週連続で基準値を下回る必要があるという厳しい条件についても調べ、これからどうなるのか新聞やテレビニュース、家族の話などを注意深く見ていくことにした。

② トピック2「ぼくたちの希望のホシガレイ」

トピック2では、寄磯の魅力について発信する内容にすることになった。豊かな自然や漁業についての紹介なども候補に挙がったが、ホシガレイの稚魚への餌やりと放流体験について取り上げることにした。こ

の年は「第40回全国豊かな海づくり大会」に向け、ホシガレイの稚魚の成育・放流を県漁協寄磯前網支所の寄磯青年部が中心に取り組みされていた。青年部が管理している6000匹のホシガレイの稚魚に、寄磯小学校の子どもたちも餌やりや水槽の掃除に定期的に取り組みさせてもらってきた。青年部の方たちから、ホシガレイの水槽を清潔に保つための苦労や、管理の難しさについて教えてもらってきた。ホヤやホタテ、ワカメなどの養殖については子どもたちも分かっていたが、栽培漁業として、育てたものを放流する意図についてはなかなか理解ができないようだった。そこで青年部部長の方へのインタビューを行った(図5)。「なぜ、ホシガレイの稚魚を



図5 青年部部長さんへのインタビュー

育て、わざわざ放流するのか。」という質問に対し、「君たちのためだよ。寄磯が豊かな海になり、君た

ちが大人になったときにホシガレイをとって少しでも生計を立てていけるようにやっている。」という言葉が返ってきたことに子どもたちは驚いていた。インタビュー後、教室で「君たちのため」という言葉について考えさせ、「この地域の未来を担う子どもたちのため」だということに気付くことができた。インタビューを通して地域の方々の自分たちに対する思いや寄磯への思いに触れることができた。ホシガレイの稚魚の放流体験(図6)では「元気に育って帰って来てね」という言葉が子どもたちから自然に聞こえ、「ぼくたちの希望の星(ホシ)ガレイ」としてトピックにまとめた。



図6 ホシガレイの稚魚の放流体験

③トピック3「ホヤの貝毒検査をクリア！」

6月下旬ホヤの貝毒検査を3週連続でクリアしたことで規制が解除されたことが分かり、トピック3として急遽取り上げることにした。ここでは、ホヤの養殖をしている子どもたち自身の保護者へインタビューを実施した。「ホヤが貝毒と分かったときの気持ち」と「ホヤの貝毒が検査を3週連続クリアしたときの気持ち」それぞれリポーター役の子どもがインタビューし、撮

影したものをまとめた(図7)(図8)。

保護者からは、ホヤの貝毒と分かったときは「残念な気持ちでいっぱいだった」

「季節的に、ホヤの最盛期に水揚げができないことで経済的に大変だった」などという率直な言葉と、貝毒検査が基準値以下

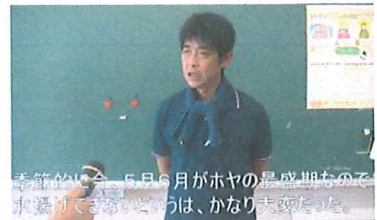


図7 漁師である家族へのインタビュー



図8 漁師である家族へのインタビュー

だったことについて「うれしいの一言に尽きる」「安心した」「消費者の安心、安全のために検査は必要なことなので、これからも続けていく必要がある」という話を聞くことができた。養殖を生業としている地域の人であり家族である方々の言葉を聞き、その後の振り返りでは「あんなに大変だと思っていたことは分からなかった」という感想が出た。

④「お魚博士のミニコーナー」「天気予報」「CM」作成

トピック同士をつなぐコーナーとして、魚についての知識を伝えるミニコーナーを作った。また、5年生は理科の「天気」の学習と関連させて、明日の寄磯の天気についての気象コーナーを作った。さらに、寄磯で漁獲量が一番高いホヤのCM撮影を行った。

ミニコーナーではメバルの名前の由来など、子どもたちが釣りをしている実際に釣ったことのある魚についての豆知識をクイズ形式で取り上げた(図9)。気象

コーナーでは、気象予報士に扮した5年生が、1学期に学習した気象衛星の雨雲の動きから明日の天気を予想



図9 メバルの豆知識の紹介

した。ホヤのCMでは、ホヤの調理方法として「ホヤ酢」だけでなく、「ホヤ卵」や「ホヤのから揚げ」、「ホヤのペペロンチーノ」「ホヤのアヒージョ」など幅広い調理方法



図10 ホヤのCM

があることを伝えられるように、5年生の社会で学習した内容と関連付けてキャッチコピーを考えながらパスタのCM風に撮影した(図10)。

⑤トピック4「エンディング(まとめ)」

エンディングのトピックでは、これまで調べてきたことを振り返り、分かったことのまとめとそれぞれの感想を撮影した。「ホヤの貝毒について正しく知った上で、地域のを積極的に買っていくことが消費者に求められることだと思う」や「地域の人たちは、自分たちの利益のためだけでなく、ぼくたちのことや未来の寄礁のことまで考えてくれている。その思いにインタビューを通して気付けた」などという感想が挙げられた(図11)。



図11 自分たちの思いを発表する様子

⑥発表会

まとめた動画を1枚のDVDに編集し発表会を行った。コロナ渦ということで、保護者や地域の方を招いての発表会は実現できなかったが、全校児童と全職員の前の発表会を実施することができた(図12)。最後に、「どんな大人になりたいか」というテーマで一人ずつ発表する機会を設けたところ、「正しい知識を持った漁師」「未来の子どもたちに希望を持たせられるような漁師」という声が挙げられた。下学年からの「ホヤのCMが面白かった」「インタビューの仕方が上手だった」という感想や、職員からの「面白いだけでなく、ホヤの貝毒の仕組みや地域の方の思いが伝わる番組になっていた」などという感想を聞くことができ、子どもたちの達成感につながった。



図12 全校の前での発表会

4 研究の成果と課題

(1) 成果

これまでの総合的な学習の時間で取り組んできた地域の良さだけに焦点化した学習ではなく、地域に起こった時事的な問題をテーマとして取り上げたことで、漁業に携わる地域の方の強い思いにより気付くことができたと考えられる。さらに、インタビュー等から漁業を生

業としている家族の思いを知ったことで、水産業というものが、単に寄礁・前網を支える産業だけでなく、「漁業=自分たちの生活」結び付けて捉えることができた。

また、まとめる方法を番組制作にしたことによって、「たくさんの人に見てもらいたい」という、伝える意欲が高まったことも成果の一つである。「調べて終わり」「体験して終わり」ではなく、伝える相手がより分かりやすく興味を持てるように工夫しようとする姿が多く見られた。そのために、理科や社会科などの他教科で学習したことを生かしてトピックの中に取り入れることができた。子どもたちから「理科でやったことを取り入れたい」「社会科でやったCM作りが生かせる」等、主体的に教科横断的に学ぶ姿勢が見られたのも成果であると言える。さらに、6年生が5年生にアドバイスする姿もよく見られ複式学級ならではの良さが現れていた。

地域の一員として自分たちに何ができるか、消費者の視点から考え、将来どんな大人になりたいのか思いを広げ深めたりすることができた。漠然と「漁師になりたい」と言っていた子どもたちから、「ホヤの貝毒のことや専門的な知識を持った漁師になりたい」や「自分たちがしてもらったように、自分の子どもが生活していけるように稚魚の育成もしていきたい」という感想からも、自分の地域を見つめ直したことで、地域のよさに改めて気付き、将来どんな大人になって地域と関わっていききたいのか考えることができたと考えられる。

(2) 課題

たくさんの人たちに知ってもらえるようにニュース番組を制作したが、その発表の場を広く作れなかったことが課題として挙げられる。コロナ渦という現状から、地域の老人クラブや漁業組合の方をゲストとして呼ぶことや保護者へ向けての発表ができなかった。へき地校として、幅広いコミュニティが形成されない中で、どのようにたくさんの人に向けて、子どもたちの成果を発信していけるかは考えていかななくてはならないと考える。例えば、牡鹿半島内の小学校とのオンラインでの発表会やDVDを見た感想を聞くなどの交流会の設定など、可能な範囲でたくさんの方の発表の場を見つけていきたい。

5 参考文献

「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」, 2021, 文部科学省